

接続助詞ノニの情意的意味についての史的考察

人文学部日本文化学科

赤尾莉央

要旨

この論文の目的は、接続助詞ノニが持つ「違和感・意外感、不満」といった情意的な意味について、歴史的観点から考察することにある。

青木(2014)は、近世以前の日本語において、接続助詞ニが広い接続関係を表すのに対し、接続助詞ノニが情意的意味を持つ逆接形式となったことについて、準体助詞ノの持つ「承前性」の意味をその起源として考えている。しかし、ノニ以外の形式（接続助詞ニや上代語のヲ・モノヲ）でも情意的逆接を表すことができるという事実を青木説では十分に説明できていないなどの問題点がある。本論ではノニが情意的意味を獲得したことに、その文末で用いられる終助詞的な用法が関連するものと考え。すなわち、従来注目されてこなかった文末に現れる終助詞的なノニの発生に注目し、終助詞的なノニがその発生以来、常に情意的な意味を表していたということを指摘する。その上で、現代語のノニに関わる先行研究も参考にしながら、「通時的に見ると、情意的な意味を表すノニは、文中で接続助詞として用いられる例より文末で終助詞的に用いられる例の方が先行して現れること」を明らかにし、「文末においてノニが情意的意味を持って繰り返し現れることで再分析が生じ、ノニという形式自体に情意の意味が定着し、それが文中において接続助詞として用いられる場合にも拡大した」と結論づける。

目次

1. はじめに.....	1
2. 問題点の整理と本論の方針.....	2
2.1 先行研究の整理.....	2
2.2 先行研究の問題点.....	3
2.3 本論の方針：衣畑（2001；2003）を参考に.....	5
3. 文末用法のノニの特徴.....	7
3.1 調査対象.....	7
3.2 調査の結果.....	8
4. 文末のノニが示唆すること.....	9
5. おわりに.....	11
【巻末付録】.....	12
【参考文献】.....	13
【調査資料一覧】.....	13

1. はじめに

日本語史上では、「ガ」や「ヲ」など、格助詞から接続助詞が生み出された事例が存在する（石垣 1955：15-54、近藤 2000：421-435）。また、「ノニ」などのように、準体助詞「ノ」が前接する形で格助詞が接続助詞へと変化した事例も存在する（青木 2014：81-105）。以下の(1)～(3)において、それぞれ a が格助詞の例、b が接続助詞の例であり、青木（2014：84）から引用したものである。

(1)

- a. やがて罷りぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり（竹取物語）
- b. 女二人ありけるが、姉は人の妻にてありける（宇治拾遺・巻三）

(2)

- a. 梅のはなおりかざしつつもろひとの遊ぶを見れば都しぞもふ（万葉集）
- b. 姉の先立ちてなりたるところへ行くを、おとこまことに…（伊勢物語）

(3)

- a. 旅にしてもの恋しきに山下の赤のそほ舟沖に漕ぐ見ゆ（万葉集）
- b. ヲゝ五助か、寒いのによく精が出るな。（いろは文庫）

(3) のノニの成立過程についても、これまで様々な議論がなされてきたが、その中でも青木（2014）は構造・意味の観点両方から考察しており、従来の研究の中で最も詳細な議論をしている。

青木（2014）の議論の中で特徴的なのは、接続助詞「ノニ」の成立について、発生・発達・定着の三段階に分けて論じていることにある。青木は、接続助詞「ノニ」が定着した段階として、それが「違和感・意外感、不満」などの情意的な意味をあらわすようになったという意味的な変化があった段階を考えている（青木 2014：97）。これは、衣畑（2001：19）が「ノニはケドに比べて、違和感、意外感、不満などを表わす」とし、ノニが単なる逆接ではなく、(4) に示すように特徴的な意味を含むとしていることを受けてのことである。以下、この接続助詞ノニの特徴的な意味を含んだ上での機能を「情意的逆接」と呼ぶこととする。

(4)

- a. 雪が降っているけど父は出かけた。（衣畑 2003：19）
- b. 雪が降っているのに父は出かけた。（衣畑 2003：19）

本論では、この情意的意味をノニが獲得する過程に関する青木の仮説を、批判的に検討す

る。青木（2014：91-97）は、接続助詞ニが広い接続関係を表すのに対し、ノニは準体助詞ノの持つ「承前性」の意味から、情意的な意味を持つ逆接専用形式になったとしている。しかし、2節で詳しく述べるが、この青木説には疑問が残る点が幾つかある。本論では、この青木説の問題点を指摘し、それに代わる仮説を提示する。具体的には、文末に現れる終助詞的なノニとの関係からそれを述べる。情意的逆接はノニという形式に依存しなくても表現可能であったが、文末で用いられるノニには基本的に常に情意的意味があった。本論では、この文末のノニが持っていた情意的意味が接続助詞ノニにも拡張された、という仮説に一定の蓋然性が認められることを、筆者自身の調査結果に基づいて述べる。

本論の構成は以下の通りである。まず、2節にて先行研究の整理を行い、問題の所在を明らかにする。続く3節では文末で用いられる終助詞的なノニについて、その発生と形態統語的特徴、意味的特徴の3点を述べる。4節ではノニが情意的逆接を獲得するまでの過程に関する青木説に代わる仮説を提示する。5節はまとめである。

2. 問題点の整理と本論の方針

2.1 先行研究の整理

青木（2014）に先んじて接続助詞ノニの成立について論じたものとしては、宮内（2003）がある。宮内（2003）は、まず、連体形準体法から準体助詞ノに移り変わっていく様相について、それぞれに後接する助詞ガ・ヲ・ハ・ニ・モを対象に数量調査した結果として準体助詞ノの十分な定着は天保以降であるとした原口（1978:440）の研究を紹介する。その上で、江戸後期を中心に、接続助詞ニとノニの使用比率の変化を追ひ、さらにノニの意味が逆接に限定された要因を考察している。その結果、江戸期の滑稽本や人情本においては、資料差や男女差が見られるが、「19世紀の初めから終わりにかけてははっきりとした変化を見せるわけではない」としている（宮内2003：108）。次に、明治初期の資料について、保守的な資料でニは勢力を見せるもののノニを上回ることがないことを指摘した上で、「江戸後期から明治初期にかけてニからノニへ移り変わっていく様相がある程度確認できる」と述べている（宮内2003：109）。そして、ノニの意味・用法が「逆接」に限定された要因としては、近代日本語表現における「整理」「単純」といった流れと、「準体助詞「ノ」による前件強調の強化も加わって、逆接専用形式として定着した」と述べている（宮内2003：115-117）。

一方、青木（2014）は、宮内の研究を評価しながらも、それが必ずしも十分なものではないとし、接続助詞ノニの成立過程についてさらに詳細に論じている。青木は、接続助詞ノニは準体助詞ノに格助詞ニが付いたものであるとした上で、その変遷を「発生、発達、定着」という段階にわけて考察している。

青木によれば、接続助詞ノニの発生は近世前期であり、その段階では「必ずしも意外感や不満を表すものではなく、単純な逆接の意味でも用いられている」という（青木2014：92-93）。また青木（2014:93-99）は、準体助詞ノは近世前期に成立していたものの、近世期を

通して完全に定着することはなかったため、200 年以上ノがあってもなくてもよい状況が続いていたとする。この期間をノニの発達段階としている。そして、青木は、発生期も含む近世におけるノニは、現代語ノニでは統語的制約があって共起が許されないモダリティ要素の前接を許すこともあるということにも触れている。さらに、青木（2014：98-99）は、接続助詞「ノニ」が定着した段階として、「意外感や不満を表」すようになった段階を想定している。(5) は、a から順に「発生、発達、定着」それぞれの段階における例であり、青木（2014：92—99）から引用したものである。

(5)

- a. 雑兵原が手にかゝらうかと思うて、何ぼうか口惜しかつたのに、そちが手にかゝれば満足ぢや。(好色伝授 1693 年) (青木 2014：92)
- b. おまへはさぞ寒かるふのに、何をしてお出だ。(いろは文庫 1836 年) (青木 2014：98)
- c. だつて、私の耳へ入る位なのに、お前さんが万更知らない事は無かろうと思ひますがね。(金色夜叉 1897 年) (青木 2014：99)

さて、青木（2014）は、接続助詞ノニの持つ「意外感や不満を表」すという情意的特徴を獲得する過程において、そこにノの持つ「承前性」「既定性」が関連していると考ええる。青木によれば、変化段階の発達の時期にあたる近世期に人々が意識したのは、ノがあってもなくてもよいが、それがあった場合にはどうなるか、ということだったという。青木は、「古代語から近代語における「連体形＋なり/ぞ/だ」が、「説明」の文脈に専ら用いられることから」、ノダの機能は「背後の事情」や「承前性」「既定性」を中心的意味であるとした上で（青木 2014：93）、「のに」のこうした意味（＝情意的逆接）は、「に」と対比的に捉えられることによって、「の」の「既定性」が意識された結果生じたもの」としている（青木 2014：97）。一方で、ノニに対する接続助詞ニの機能は、「かなり広い接続関係を表す」ものだったとしている（青木 2014：91）。

2.2 先行研究の問題点

ここまで、ノニの歴史変遷についての各種の先行研究を見てきた。特に青木（2014）は、ノニが準体助詞ノに格助詞ニが後接したものが構造変化し成立したものであるとしているという構造的な視点と、情意的意味の獲得という意味的な視点の両面から捉えている点で他の先行研究よりも優れているものと考えられる。しかし、そこにはいくつかの問題点がある。

まず、大きな問題点として、ニとの対比によってノニが情意的逆接を確かなものにしていくとする反面、ニが衰退していく理由に関しては論じられていない点がある。しかし、この問題を解決するためには、接続形式全体の歴史を扱う必要がある。それは、本論で扱う範囲を大きく超えるため、保留する。

次に指摘すべきなのは、青木（2014: 93）が「古代語から近代語における「連体形＋なり／ぞ／だ」が、「説明」の文脈に専ら用いられる」としている点である。そうであるのなら、それは、ノが無くても「承前性」等の意味は表すことができたということだと考えられる。

この点については、衣畑（2001）が、現代日本語のノニが持つ情意的意味について、ノニに依存しなくても表現可能であると述べている点が参考になる。衣畑（2001）は、「ノニは、個々の語彙や文脈によって表現されるような語用論的意味を、語彙の意味として定着させている」と述べており（衣畑 2001：30）、ノニと同じ意味を表す文をノニを使わずに表すことができることをいくつかの例とともに示している。以下の（6）（7）は衣畑（2001：28-29）から引用したものである。

（6）（訪問の約束をしていた相手が予定外の時間に来たことに驚いて）

- a. こんなに早い時間に珍しいわね。（衣畑 2001：28）
- b. こんなに早い時間なのに珍しいわね。（衣畑 2001：29）

（7）（ある人が海外旅行に行ったということに不満を感じて）

- a. 皆がこうして働いている時にいい気なもんだよ。（衣畑 2001：28）
- b. 皆がこうして一生懸命働いているのにいい気なもんだよ。（衣畑 2001：29）

また、愛知県尾張方言には、ノニという接続助詞がない。その代わりに、ニで情意的逆接を表すことができる。（8）は平子・久保蘭・山口（2019）から引いたものである。

（8）

- a. モット アシガ ハヤケリャ アイツニ オイツケルニ（平子ほか 2019：24）
- b. アシタ アメン フラナンダラ エーニナー（平子ほか 2019：66）
- c. コノ リンゴハ タカカッタニ チョットモ アマナエー（平子ほか 2019：66）

上述の衣畑（2001）の研究で指摘された現象や、（8）のような現代諸方言の例から考えると、必ずしも情意的な意味を表すためにノがあることは必須ではないように思われる。

これに関連して、今一つ問題であるのは、ニのみで情意的逆接を示す例が、ノニの発達段階である近世期において、文中と文末のどちらに現れる用法でも見られる点である。青木（2014）をはじめ各種の先行研究では、この点についてほとんど触れられていない。

（9）

- a. まだわかいに気の毒な（春色辰巳園 1833 年）
- b. よしかへお気持の悪いに（春色梅児与美 1833 年）

以上のことが示唆するのは、情意的逆接を表す時には、必ずしもノニは必要ではない、ということである。つまり、ほかの形式でも情意的逆接を表すことが可能であるということである。となれば、ノニが持つ情意的意味の発生にノの持つ「承前性」「既定性」が関連しているという青木説には再考する余地があることになる。次節では、青木（2014）が特定の形式の意味・機能をノニの情意的意味の起源とするのに対して、情意的な意味が特定の形式の意味・機能を起源とせずに発生しうることを指摘した衣畑（2003）の研究を見ながら、本論における考察の方針を説明する。

2.3 本論の方針：衣畑（2001；2003）を参考に

上で述べたように、ノニが情意的な意味を獲得したことを、青木のようにノの持つ「承前性」「既定性」が関連していると考えerるのにはいくつかの問題がある。そこで本論では、青木（2014）とは異なる観点からこの問題について考えてみようと思う。参考とするのは既に言及した現代日本語のノニについて扱った衣畑（2001）と、上代語のヲ・モノヲの起源について考察している衣畑（2003）である。

衣畑（2003）は、ノニと同様の情意的意味を持つ、上代語のヲ・モノヲについての研究であるが、そこでは、上代語のヲ・モノヲの意味を（10）と定めた上で、ヲ・モノヲがその意味を獲得した経緯について、（10）の意味を表す構文全体に焦点を当てて考察している。

（10）

P（＝先行節、話し手の知識）という理由により、話し手が、当該の現実に対して、違和感・意外感・不満を感じている、と解釈せよ

特に衣畑（2003）の主張の中で注目されるのは、上代語のヲ・モノヲが（10）の意味を獲得した経緯について、その意味の起源をヲやモノという特定の形式に求めるべきではない、としている点である。

衣畑（2003:58）は、ヲ・モノヲが持つとされる（10）の意味は、特定の形式に依存しなくても表現可能であったことを示した上で、当初ヲ・モノヲは、文脈に依存して表されていた（10）の意味を、より明示的に示すためのものであったとする。そして、ヲ・モノヲが（10）の意味を表す形式として定着した契機として、衣畑（2003:58-60）は、ヲ・モノヲと反実仮想の助動詞マシとの共起現象を取り上げている。

マシが表す反実仮想には、「現実の事態に満足している」あるいは「現実の事態に満足していない」の二つのケースがある（衣畑 2003：59）。つまり、「現実の事態に満足している場合、不満な事態を想像し、そうならなくてよかったと安心」し、「現実の事態に不満を感じる場合は、満足できる事態を想像しその不満を表す」が、「マシ自体はその二つのケースに対してニュートラルであり、どちらの例も見られる」とする。ところが、衣畑（2003:59）によれば、「マシにモノヲが接続した例には、現実の事態に対し不満に思う例」しかなく、

「ヲ・モノヲは、マシが不満を感じる現実の事態に対して述べられたものであることを示す役割を持っている」と考えられる。衣畑（2003：60）は、マシとの共起をきっかけにした「再分析」によって（10）のような意味がヲ・モノヲに定着した、と結論づけている。

すでに述べたように、本論で問題とするノニの情意的な意味については、「ノ」の承前性・既定性をその起源として捉える青木（2014）の説がある。しかし、上述のようにそこにはいくつかの問題があった。となれば、衣畑がヲ・モノヲについて論じたように、ノニの情意的な意味についても、「ノ」のような特定の形式に起源を求めるのではなくて、情意的な意味を表す文にノニが使われている文脈が先にあって、そこから再分析が生じて、「ノニ」に情意的な意味が定着したという可能性を考える余地が生じる。

本論では、この点について、現代日本語におけるノニについて分析をした衣畑（2001）を参考にし、文末で終助詞的に用いられるノニに注目して論じる。衣畑（2001）は、現代日本語のノニについての意味を記述したものであるが、その終助詞的用法に関しても考察がなされている。衣畑（2001：27）は、ノニを接続助詞ノニと終助詞的ノニとに分け、それぞれの機能を（11）のように分析している。

（11）

a. 「p のに ψ 」（接続助詞ノニ）

p という理由により、 ψ を、話し手にとって違和感・意外感、不満を感じさせる事態を表す文と解釈せよ

b. 「p のに」（終助詞ノニ）

p という理由により、話し手が、当該の事態 ψ に対して、違和感・意外感、不満を感じていると解釈せよ

例えば、（12a）の例文におけるノニは接続助詞であるため（11a）のように解釈される。つまり、ノニの前件は違和感・意外感、不満を感じる根拠（＝現実の事態への態度・評価）であり、後件は現実の事態を表している。対して（12b）の例文におけるノニは「終助詞的な用法である」（衣畑 2001：29）。（11）から考えるに、接続助詞と終助詞の違いは後件に現実の事態が表されるか否かであるが、（12b）ではそれが表されていなくても情意的な意味が表されていることに注目したい。

（12）

a. 雪が降っているのに父は出かけた。（衣畑 2001：19）（4b 再掲）

b. こんなに早い時間なのに…（衣畑 2001：28）

このことから考えられるのは、違和感・意外感、不満を感じる根拠さえ示せば、情意性は示せるのであって、ノニの後件として現実の事態が述べられなくても良いということであ

る。つまり、現代日本語におけるノニの情意的な意味は、ノニが前件と後件とをむすぶ接続助詞として機能しなくても生じるものであり、むしろ、衣畑の記述からは、ノニの情意的な意味は、典型的にはそれが終助詞的に用いられる場面に生じるものと考えられる。

本論では、この衣畑（2001）の現代日本語のノニに関する記述から考えられる「ノニの情意的な意味が、典型的にはそれが終助詞的に用いられる場面に生じる」ということを、ノニの歴史的過程にも当てはめて考える。つまり、通時的に見てもノニの情意的意味は、文末の終助詞的用法において先に生じたものが、文中における接続助詞用法の場合に拡張されたのではないかと、という仮説である¹。次節以降では、筆者自身による調査結果に基づいて、この仮説を検証していく。

特に注目すべきは、文末のノニは、青木が接続助詞ノニ（以下「文中のノニ」）に情意的な意味が生じたとするより以前に、すでに情意的な意味を持っていたと考えられる例があることである。次節以降で、この点について詳細に論じる。

3. 文末用法のノニの特徴

本節では、ノニが情意的な意味を獲得するにあたって、文末における終助詞的な用法がその契機となったとする仮説を検証する。ここでは、終助詞的なノニの初出年代や意味に注目する。先取りする形で結論を述べると、形式的には終助詞的なノニの初出年代は、接続助詞の場合より遅れるものの、情意的な意味の表示については、接続助詞の場合より終助詞的に用いられる場合の方が時代的には先であることが分かった。このことから、文末において情意的な意味を持って終助詞的なノニが繰り返し現れることでノニという形式に情意的な意味が定着し、その結果として、文中で接続助詞として用いられる場合にも情意的逆接の意味を持って使われるようになった、ということが考えられる。

以下、3.1 節で調査対象となる資料について述べた後に、3.2 節では終助詞的なノニの文献上での現れ方や意味について調査した結果を述べる。

3.1 調査対象

本論では、コーパス検索アプリケーション『中納言』と『日本古典文学大系本文データベ

¹ 『日本国語大辞典 第2版』の「ものを」の語誌（2）に、終助詞モノヲには、単に「詠嘆を表わす」ものと、「特に、実状に対する不満や残念の気持をこめての詠嘆を表わす」ものがあり、この二つは「詠嘆表現という点では同じである」が、後者は「現在または過去の事実に対する不満や後悔の念などが含まれているため、現代語の「のに」に相当」し、ここにモノヲの終助詞の用法が接続助詞のモノヲの用法に転ずる契機がある、という記述がある。このことも、文末用法が文中用法へ使用範囲を広げたという見方の一助になる。

ース』²に含まれる資料を対象に文末用法のノニを調査し、その発生時期と形態統語的特徴、意味の 3 点を考察した。これらに含まれる対象となる作品の詳細については、巻末の調査資料一覧を参照されたい。

3.2 調査の結果

表 1 の上段は文末のノニが見られた作品の成立年を示しており、下段は上段で示した間の作品中に見られた文末ノニの件数を示している³。

1702~11	1712~21	1722~31	1732~41	1742~51	1752~61	1762~71	1772~81	1782~91
1	3	0	0	4	0	0	2	3
1792~1801	1802~11	1812~21	1822~31	1832~41	1842~51	1852~61	1862~	総数
1	4	2	2	16	0	4	2	44

表 1：全体の調査結果

この表から明らかな通り、文末用法のノニの初出は 1702 年である。

(13) 戒名は山田といふのに。(傾城壬生大念仏 1702 年)

一方、種々の先行研究が明らかにしている通り、文中のノニの初出は近世前期である。例えば、青木（2014：92）には 1666 年の例が見られる。

(14) ひがしより春はきたのに西の京興ある今日の雪ぞみなみよ（古今夷曲集 1666 年）

つまり、文中のノニの初出は時代的には文末のノニよりやや遡る。このことから、形式的には、文末の終助詞的なノニは文中の接続助詞ノニの「言い差し」として生じたものであると考えて良いだろう。

一方、形態統語的特徴については、青木（2014）によると、近世期の接続助詞ノニの場合には、それにモダリティ要素が前接することが可能であったが、文末用法の場合でも同じくモダリティ要素が前接する例が確認された。(15) にモダリティ要素が前接した文末用法のノニを示す。

² 『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj/search>

『日本古典文学大系本文データベース』 <http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>

³ 『中納言』と『日本古典文学大系本文データベース』それぞれに収録される作品の詳細な調査結果については、巻末に付録として掲載した。

(15)

- a. 逢たかったで有ふのに。(假名手本忠臣蔵 1748 年)
- b. 國許ならばいたし方もあらふのに。(黄表紙本 敵討義女英 1795 年)
- c. 「死ずと仕様もあらふのに。」(小袖曾我薊色縫 1858 年)
- d. あなたにも御苦勞をかけますまいのに(仮名文章娘節用 1834 年)

最後に、本論の中心となる意味的な特徴についてである。今回の調査で確認された文末の終助詞的なノニの意味を確認すると、『日本古典文学大系本文データベース』で訳せなかった例が 2 例あったものの⁴、それ以外はすべて情意的な意味を持つものと捉えられるものばかりであった。(16) に情意的意味が見られる例を示す。

(16)

- a. よしてくれろと言たのに。(伽羅先代萩 1713 年)
- b. ヤ何するとはおれが飯をおれが喰のに。(新版歌祭文 1870 年)
- c. 「ハテ、来いと言ふのに。」(韓人漢文手管始 1789 年)
- d. ゑゑ其色を早ふいへといふのに (粋の曙 1820 年)

4. 文末のノニが示唆すること

文末のノニにおいても、青木 (2014) が指摘した文中のノニの場合と同じように近世期においては、モダリティ要素が前節する例が見られた。つまり、形態統語的特徴としては、文中用法と文末用法との間に大きな差はなかったと考えられる。

意味的な特徴を見ると、1702 年に初出が見られて以来、文末の終助詞的なノニは、解釈不明の例が 2 つあるもののそれ以外は全て情意的な意味を示すものであった⁵。一方、文中のノニが情意的な意味を獲得し、定着させた時期は、青木 (2014) も明示的に示してはいないものの、青木 (2014: 92) の (19b) に 1693 年の『好色伝授』の例が「情意的な意味がないもの」として挙げられていることなどからすれば、1700 年前後にはまだ文中のノニには少なくとも情意的な意味が定着していなかったと言えるだろう。

⁴ 以下に示す 2 例は調査で得られたものの筆者が訳せなかったものである。

A やっぱり久三が役相應米踏む白井がましじゃのに。(夏祭浪花鑑 1745 年)

B 親父殿。嫁女や。地ハル 孫の顔[^]見覺て ウ おこふのに。(義經千本櫻 1747 年)

⁵ 『中納言』での検索結果の中に、明らかな倒置である例が 2 つ見られたが、これもまた情意的逆接と解されるものであった。

(17) 雑兵原が手にかゝらうかと思うて、何ぼうか口惜しかつたのに、そちが手にかゝれば満足ぢや。(好色伝授 1693 年) (5a 再掲)

ここで注目したいのは、形式的には文末のノニの方が出現するのは遅れても、情意的な意味を定着させていたかどうか、という点については文末のノニの方がその意味の定着が早かったと思われる点である。

衣畑 (2003) では、ヲ・モノヲが(10)の意味を獲得する契機として、マシとの共起を挙げていた。衣畑は、ヲ・モノヲがマシと共起する際には常に(10)の情意的な意味を表し、そのことが、ヲ・モノヲが情意的な意味を獲得し、定着させたことの遠因となったと述べられていた。ノニにおいては、ヲ・モノヲと言うところのマシの存在が、文末における終助詞的な用法に当たるのではないかと本論では考える。

つまり、ノニの文中用法では、近世初期に単純な逆接の例も見られた (青木 2014 : 92) が、文末用法では先述のように、常に情意的な意味があった。そのことは、文末でノニが情意的逆接の意味を持って繰り返し使われ、再分析を起こした結果、ノニという形式に情意的な意味が定着し、そして、それが文中のノニにも拡張して、結果、接続助詞ノニが情意的逆接を表せるようになったと考えることができる。

ここまで本論で述べたノニの歴史的変遷の過程を以下に図で示す。図の網掛け部分は、情意的な意味を持っていることを示す。

	文中で用いられる接続助詞的ノニ	文末で用いられる終助詞的ノニ
	↓	↓
1666年	発生：例文(14)	↓
	↓	↓
1693年	例文 (17)	↓
1702年	↓	成立：例文(13)
	↓	↓
	↓	再分析
	↓	↓
	↓	情意的な意味がノニという形式に定着する
	↓	↓
	定着(青木2014)：文中でも情意的な意味を持ってノニが使えるようになる	↓
	↓	↓
	↓	↓

文中で用いられるノニは近世前期に成立し、そこから 1700 年前後まではまだ情意的な意味は持っていなかった。対して文末で用いられるノニは 1702 年の成立当初から一貫して情

情的な意味を表していた。青木（2014）には接続助詞ノニの「定着」の時期は具体的に示されていないが、情意的な意味を表すようになった段階を接続助詞ノニの定着段階であると想定しているため、文末で用いられる終助詞的なノニは 1702 年から接続助詞ノニの定着段階までの間で再分析を起こしたと考えられる。そして、その結果、情意的な意味がノニという形式に定着したと考えられる。

5. おわりに

本論では、ニや上代語のヲ・モノヲのように、ノニ以外の形式でも情意的逆接を表すことが可能であるということを出発点に、ノの承前性などの意味をノニの「情意的逆接」の起源とする青木（2014）の説には問題があるとし、青木（2014）とは異なる観点からノニが情意的逆接を獲得するまでの仮説について検証した。

衣畑（2003）は、上代語のヲ・モノヲが情意的な意味をいかに獲得したかについて、情意的な意味が常に表される構文に注目し、それをきっかけにした再分析から、ヲ・モノヲに情意的な意味が定着したと論じていた。これを参考に、本論ではノニが文末で使われるときに常に情意的意味を表すという特徴があることに注目し、これがきっかけとなり、ノニに情意的な意味が定着したという仮説を提案した。

これは、衣畑（2001）による現代日本語のノニについての研究からも支持されうるものである。衣畑は、現代日本語におけるノニの情意的な意味は、典型的にはそれが終助詞的に用いられる場面に生じるとしており、本論では、この衣畑の考えを参考にして、通時的に見てもノニの情意的意味が、文末の終助詞的用法において先に生じたものであるとする仮説、つまり、文中における接続助詞ノニの情意的意味は後から現れたものであると考えた。

本論の調査は、コーパスに含まれる資料を対象にしているため、現存するすべての資料を対象にできていないという点で不十分であるが、意味の起源を特定の形式には求めないという上代語のヲ・モノヲに関する衣畑（2003）の研究と同じ方針での考察が、ノニの場合にも有効であることは十分に示せたかと思われる。ノニの情意的逆接の起源を青木説のようにノの「承前性」に求めると、ニだけで情意的意味が表される事実との間に齟齬が生まれる。本論で展開した、文末の終助詞的なノニから情意的意味が定着したという仮説の方が、問題は少ないと思われる。

【巻末付録】

作品名	成立年	件数
竊潜妻	1807	2
粋の曙	1820	2
明烏後の正夢	1823	1
仮名文章娘節用	1831	1
	1834	1
春色梅児与美	1832	1
	1833	3
春色辰巳園	1833	1
	1834	4
	1835	3
春色江戸紫	1864	2
総計		21

表 2：『中納言』での調査結果

作品名	成立年	件数
傾城壬生大念仏	1702	1
伽羅先代萩	1713	3
夏祭浪花鑑	1745	2
義經千本櫻	1747	1
假名手本忠臣蔵	1748	1
新版歌祭文	1780	2
韓人漢文手管始	1789	3
黄表紙本 敵討義女英	1795	1
東海道中膝栗毛	1802	1
浮世風呂	1809	1
春色辰巳園	1833	1
幼稚子敵討	1841	2
小袖曾我薊色縫	1858	4
総計		23

表 3：『日本古典文学大系本文データベース』

【参考文献】

- 青木博史 (2014)「接続助詞「のに」の成立をめぐって」青木博史・小柳智一・高山善行 (編)
『日本語文法史研究 2』ひつじ書房 81-105
- 石垣謙二 (1955)『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 衣畑智秀 (2001)「いわゆる「逆接」を表すノニについて：語用論的意味の語彙化」『待兼山
論叢 文学篇』35 19-34
- 衣畑智秀 (2003)「上代語のヲ・モノヲーその起源をめぐって」『和漢語文研究』京都府立
大学国文学会 49-63
- 近藤泰弘 (2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 原口裕 (1978)「連体形準体法の実態—近世後期資料の場合—」春日和男教授退官記念語文
論叢刊行会 (編)『春日和男教授退官記念語文論叢』桜楓者 431-450
- 平子達也・久保蘭愛・山口響史 (2019)「木曽川方言文法概説」青井隼人・木部暢子 (編)
『愛知県木曽川方言調査報告書』国立国語研究所 1-70
- 宮内佐夜香 (2003)「江戸後期から明治初期における接続助詞ニ・ノニの消長」『日本語研究
(東京都立大学)』23 105-119

【調査資料一覧】

『中納言』

- 盛田小塩 (1807)『竊潜妻』
- 土津古出房供行 (1820)『粋の曙』
- 滝亭鯉丈・為永春水(1823)『明烏後の正夢』
- 曲山人(1831)『仮名文章娘節用』
- 為永春水 (1832)『春色梅児与美』
- 為永春水 (1833)『春色梅児与美』
- 為永春水 (1833)『春色辰巳園』
- 為永春水 (1834)『春色辰巳園』
- 曲山人(1834)『仮名文章娘節用』
- 為永春水 (1835)『春色辰巳園』
- 山々亭有人(1864)『春色江戸紫』

『日本古典文学大系本文データベース』

- 近松門左衛門 (1702)『傾城壬生大念仏』
- 松貫四 (1713)『伽羅先代萩』

並木宗輔（1745）『夏祭浪花鑑』
竹田出雲・三好松洛・並木千柳（1747）『義經千本櫻』
三好松洛・並木宗輔・竹田出雲（1748）『假名手本忠臣蔵』
近松半二（1780）『新版歌祭文』
並木五瓶（1789）『韓人漢文手管始』
南杣笑楚満人（1795）『黄表紙本 敵討義女英』
十返舎一九（1802）『東海道中膝栗毛』
式亭三馬（1809）『浮世風呂』
為永春水（1833）『春色辰巳園』
並木正三（1841）『幼稚子敵討』
河竹新七（黙阿弥）（1858）『小袖曾我薊色縫』